



## 東日本大震災 社協職員派遣活動報告

東日本大震災が起きてから 50 日以上が経ち、震災直後はボランティアの受け入れが出来なかった地域も徐々に災害ボランティアの受け入れが開始され、ゴールデンウィークに差し掛かると、一部の被災地では人が多すぎて受け入れが出来ないほどのボランティアが集まるようになっていきます。

近畿 2 府 4 県の社会福祉協議会は、3 月 18 日より近畿ブロックとして宮城県の被災地に交代で職員を派遣し、現地の社会福祉協議会職員の応援を行っています。泉南市社会福祉協議会からも 4 月 11 日(月)から 18 日(月)の間に一名の職員が宮城県南三陸町へ派遣されました。

この「すまいる」号外では、派遣期間を終えて帰還した職員より、被災地の様子や災害ボランティアセンターの内容、そして派遣の感想を寄稿していただきました。

私は、4 月 11 日(月)～4 月 18 日(月)の期間で、宮城県南三陸町という人口約 18000 人の海山に囲まれた自然豊かな町へ第 7 クール派遣職員として行かせて頂きました。近畿ブロックの派遣職員は宮城県へ 35 名派遣され 5 市 3 町に分かれ、南三陸町へは 8 名体制となりました。



高台からの様子です。このような様子が所々で見受けられました。



メディアでも注目を集めていた防災対策庁舎も看板と鉄骨だけが残っていました。

仙台市より北へ 3 時間かけて南三陸町に入り、リアス式海岸の沿岸部へ向かうと景色が一変しました。家がどこに存在していたかわからないぐらい辺り一面瓦礫で、道路がかろうじて確保されていました。空気は砂埃で汚れ、沿岸部特有の潮の臭いと異臭が混じっていました。

4月15日(金)に電気が復旧しましたが、ガスや一般電話、水道は使用できず、死者・行方不明者は約1000人、避難所数は町内で41カ所、避難人数は未だ約6800人となっているのが現状でした。南三陸町災害ボランティアセンター(以下VC)は、大型避難所となっているベイサイドアリーナというスポーツ施設の広大な敷地内に設置され(役場も同敷地内)、以下の担当に分かれていました。活動中の心掛けとしては、地元社協職員の負担を少しでも軽減できるよう、災害VCの機能円滑化に努めました。



ベイサイドアリーナでは、ほぼ毎日炊き出しが実施されていました。約1000人が避難していた大型避難所という事もあってか有名人の来訪が多くあったそうです。

## 南三陸町災害ボランティアセンター内の各担当について

### 受付・マッチング

衛星電話にて様々な問い合わせの対応、V側のニーズの受付を行いました。炊き出しを実施したいというニーズが多く、メニューも讃岐うどんやブルコギ等々々でした。高校・大学生のVも定期的に多く活動されていました。地域支援班等からの各避難所のニーズとV側のニーズのマッチングを行い、活動に関する情報提供、諸注意の周知を行い、活動となりました。長期Vを癒す整体等もありました。



テント内でボランティアの受付・登録・活動紹介を行っていました。新規個人・団体・継続個人・団体と大別されていました。

## 地域支援・情報発信

各避難所をまわり情報収集、ニーズの把握を行いました。各ニーズの調整を行い、広報、ホームページ、口コミ等により情報発信を行いました。出来合いの料理ではなく、野菜やお米等素材そのものが欲しい、一度も物資や炊き出しがない等、同じ町内であっても避難所によって状況が異なっていました。



災害ボランティアセンターは大型テントに設置されていました。ボランティア活動時間は9時から16時でした。9時前にはテント周辺は人でいっぱいになっていました。



南三陸町社協の方々、近畿ブロック社協職員、認定NPO法人JHP・学校をつくる会で災害ボランティアセンターが組織されていました。

## 避難所支援

災害VC設置場所が避難所と物資収集所になっていたため、炊き出しニーズを避難所担当と調整、物資ニーズを物資担当者で調整、配分を行いました。

避難所生活を送っている方が中心となって物資の整理を行っていました。

## 思い出探し隊

佐藤南三陸町長の命で倒壊した家屋から思い出となる写真等を収集、洗浄を行いました。



# 災害地派遣を通じて

1週間という短い期間でしたが、人の力、人とのつながりの素晴らしさを実感しました。その上で、マンパワーや人とのつながりの強さを支援や復興につなげていく役割を担う災害ボランティアセンター（以下：災害VC）の認知度の低さを痛感しました。被災者、V希望者、その他団体等全体を通して認知されていませんでした。実際にニーズの把握まで行けず、関係づくりの段階である地域もありました。

こういった大規模災害により、皆様の災害に対する意識を高まりましたが、普段より災害VCが主となり、災害のない時にこそ、準備を万端にする、それを継続する、周知する、受け身でなく、こちらから発信していくべきであると思いました。以前開催されたような災害VCの説明とシミュレーションは大いに役立つと思われるので、継続して開催し地域の皆様方に災害VCの名前だけでなく、活動内容も理解して頂ければと思いました。

個人的な感想としては、地元社協職員の方々、一般Vの方々、近畿ブロックの派遣職員の方々素晴らしい方々ばかりで、支援を行ったというよりも勉強させて頂いた事の方がはるかに大きかったです。

御家族が行方不明にも関わらず、「震災がなければ、皆様と出会うことや人とのつながりを感じる事ができませんでした。ありがとうございました。」と言った現地社協職員の方の言葉が忘れられませんでした。

災害に備えて無鉄砲に物資を購入するのではなく、自活できる知恵を養い、知識を蓄える事が現代社会において必要であると気づかされました。